

Athlete Interview

file 1

デフサッカー 古島 啓太

来年 2025 年 11 月開催の「東京 2025 デフリンピック」までおよそ 1 年。
デフサッカーを牽引する古島選手に、幼少期のこと、家族のこと、そして 1 年後に控えた
デフリンピックに対する現在の想いをきいた。



サッカーについて

サッカーは父と兄がやっていた影響で5歳から始めました。小学校4年生までは地域のサッカークラブに入っていて、“楽しければいいや”という感じでした。でも、小学5年でレベルの高いチームに移ってから、自分の力のなさに気づきました。コミュニケーションもいろいろ大変だったけれど、その環境で揉まれて、自分をもっとうまくならないといけないと感じました。小中学校で所属していたチームのレベル高かったので、試合に出られる時間は長くありませんでした。ベンチが多かったけれど、スーパーサブとして結果を残すという思いで、頑張っていました。



デフサッカーを始めたのは20歳の時です。ろう者の成人式に行って、デフサッカーをやっている人に会いました。「一緒にやってみないか」と声をかけられましたが、はじめはレベルの低さに断っ

ていました。その話をきいた先輩にレベルの高い大会に出ることを勧められ、遊び程度に行くようになった頃、ちょうど見に来ていた日本代表の監督に「合宿に来なさい。」と声をかけられました。デフリンピックを知ったのも、日本代表合宿に参加したことがきっかけでした。

聴力について

耳がきこえないことに気づいたのは、2、3歳の時です。親が名前を呼んでも振り向かず、病院に連れて行かれました。小さい頃は、親からは落ち着きがないと言われていました。僕だけなのかもしれないけれど、きこえない分、周りを気にしてしまう癖があって、小学校の時もみんな集中して先生の話をきいている中、僕は周りを気にしていたから、落ち着きがない子と見られていました。

2、3歳からろう学校に通って発音の練習をしたり言葉を覚え、小学校から大学までは健聴者と同じ学校に通いました。小中学校では授業中に先生がサポートしてくれましたが、高校は私立だったので、特別扱いはできないと言われ、自分で何とかするしかない状況でした。それでも、先生が黒板を向いて書きながら喋ると口の形が見えないので話すときは前を向いて話してほしい、という配慮だけはお願いしました。それでもわからないときは自分から積極的に聞きに行き、何とか高校は修了できました。

きこえ方は、静かな部屋だったら補聴器をつけて音に集中し、口の形を読み取ることで、コミュニケーションを取ることができます。屋外では雑音が入ってしまうときこえにくくなってしまふの

で、手話だったり口を大きく動かしてゆっくり話してもらうことでコミュニケーションを取るようになっています。大きくゆっくりと口を動かしてもらえると音と形が一致して理解しやすいので、口の形が一番大事ですね。補聴器を外すと全く聞こえません、無音です。

以前、大きな地震が起きた時に電車が急に止まったことがあり、周囲はざわざわしていましたが、僕は何があったかわかりませんでした。駅を降りても情報がなく、自分がどうしたらいいか、周りがどうなっているかわからない状況で、以前勤めていた会社ですが、1時間半懸けて歩いて行って、誰もいなかったということがありました。帰ってもよかったはずだけど、それを知らずに会社に行き、帰りも大変な状況で、結局は父親に迎えに来てもらいました。何か起きた時の対応を目で見られる情報があればよかったと思います。いつかは南海トラフみたいなもの起きるかもしれないので。

アイデンティティ

僕はプライドが高かったのかもしれないけれど、18歳まで障害者だと信じたくない自分がいました。でも、18歳の時に出会った全日本ろう学生懇談会（ろう者の学生の集まり）で、同じ悩みを持った学生がいることや、情報保障や手話の存在を知りました。そのことがきっかけで、自分の考え方が変わってきて、聴覚障害者であるけれどやれることはたくさんあると思うようになりました。そして、デフサッカーにも出会えました。

ろうの子供たちに伝えたい

デフリンピックという存在を早く知っていれば夢もまた変わっていただろうと思います。日本代表になりたいという夢は小さいころからあったので、少し違うかたちであっても、日の丸を背負えるっていう夢を教えてあげれば、競技に対する視野を広く持てたり、継続しようという気持ちが出てくると思うので、今のろうの子供たちにもデフリンピックの存在があることを伝えていきたいという強い想いがあります。

一方で、きこえない子の立場を思うと、ひとりでは不安になると思います。それでも社会に出れば“どんな苦しいことでも乗り越えなきゃいけない”ということを知るべきなのかなあとと思います。そしてそれを親が伝えたいうえで、“諦めないこと”を教えることが大事だと考えています。

親と子



自分が親になって気づいたけれど、僕の両親は、自分の子がきこえないとわかったとき、不安だったろうなと思いました。それでも、健聴者の中で生きていかなきゃいけない、努力しないとイケないという部分があったので、発音にも厳しかった

です。例えば「し」が「ち」になったり、「つ」が言いにくくて間違ったら、「言い直さない」と言われました。でもそのおかげで、今話することができるようになっていて感じています。

一方で、今は自分も親になりました。子供はきこえるけれど、手話をなかなか覚えてくれないですね。上の子は5歳だけれど、私も妻もきこえないことを理解していると思います。私が妻を呼んでもきこえていないときは、息子が動作・しぐさで伝えてくれています。やっぱりきこえないことってわかっているんだなあと感じます。

きこえない親ということで、他の家庭とは少し違った家族のかたち。だからこそ、息子にはどんなかたちでも他人の役に立てる人になってほしいと思います。手話だけじゃなくて、目が見えない人や耳がきこえない人、いろんな人の役に立てる子になってほしいです。

家族との時間

妻も働いているので、僕が送り迎えもするし、子供との時間も作って遊ぶし、サッカーもする…いろいろバタバタしているけれど、子供の時間と決めたら子供と向き合う時間を優先にするようにしています。それでも、子供はさみしい思いをしていると思いますね。1日は24時間しかないから、どうやって調整しようかなと…例えば、朝5時半に妻が起きて、6時に息子と僕が起きて、ご飯の用意をして、妻が7時に出て、僕が7時20分くらいまでに2人の子供を保育園まで送って、8時45分から15時くらいまで会社で仕事、送り迎えまでの間でトレーニング、17時くらいまでに子供たちを

迎えに行って…夜練習があるときは子供たちを妻にお願いして、ないときは子供との時間を取って、夜はゆっくり過ごすという感じです。

土日はサッカーがメインになるから、そこは妻にまかせています。だから平日は時間をつくるように、うまく回しながら生活しています。

子供は5歳と1歳です。1歳の子は、もちろんまだ歩けないのですが、気が付いたらいなくて、あれどこ行った？ってなることもあります。ハイハイでいろんなところ行ってしまうので目が離せませんね。



アスリートと仕事

前の会社では、一般採用で会社員として働いていたけど、年を重ねるにつれて残業も増えてきてデフサッカーのトレーニングの時間の確保がなかなか難しくなってきました。そんな時に縁があって、アスリート雇用をしている今の会社（住友電設株式会社）に入りました。

パラアスリート雇用でも、会社によって形態や仕組みが違うので、自分に合ったスタイルの会社に入るのがベストだと思います。自分と会社のマ

ツチングで、競技と仕事の両立が実現できるんじゃないかなと思います。

サッカーを続ける原動力

単純にサッカーが好きなことですね。デフサッカーが好きだから、30年近く続けられています。そして、今まで支えてくれた人がいるので、その方々へ恩返しをしたいと思っています。もちろん自分の子供にも、自分のパパはサッカー選手、日本代表なんだって自慢できるようなパパでありたいって思います。

夢の“サムライブルー”



小さいころからの夢がかなった瞬間でした。選手の中には涙を流した人もいました。若手はよっしゃーというくらいの感覚かもしれないけれど、自分たちにとっては JFA のユニフォームを着て日の丸を背負うという事は簡単ではありませんでした。今までの日本ろう者サッカー協会を立ち上げてから、コンクリートの上でサッカーをしていたことや、アディダスではない他のメーカーのユニフォームを着て日の丸を背負って戦った先輩方もい

るし、多額の自己負担でいろんなことを犠牲にして戦った先輩方もいっぱいいました。その先輩方がいるおかげで、今の JFA の“サムライブルー”のユニフォームを着られていると感じています。そうした想いも、これからの世代に引き継いでいきたいと思っています。これからは担う子供たちにとっても、デフリンピックを目指せばあのユニフォームを着られるという目標が目に見えるので、子供たちにも夢を与えやすい環境になったのかなと思います。



デフリンピック

デフリンピックの存在は、前と比べて知っているという人は増えてきたと思います。そういう意味では、デフアスリートたちも頑張って PR した甲斐がありました。日本での開催は、人生に一度しかない瞬間です。このチャンスを逃してはいけないと思っています。健聴者ときこえない方とともに共生社会を作っていくためには、手話を覚えてもらうきっかけだったりとか、デフリンピックを通して応援してもらえるようにしていきたいなと思っています。多くの人にデフリンピックを知ってもらえるように、僕も積極的にイベントに参加しています。

子供たちに伝えたいこと

イベントに参加していると、手話を知らない子供たちがたくさんいることに気づかされます。子供たちには、きこえない人に出会ったら手話を使ってほしいなと思います。そのために、きこえないことってどういうことなんだろうって考えてもらいたいですね。

そして、サッカーをしている子供たちには、サッカーを通じて得られること、チームワークだったりあきらめないことだったり、続けることだったり…サッカーを通じて得られたことを、これからの社会で生かしてもらえたらなと思います。

Athlete1 古島 啓太

生年月日 1990年11月4日

所属 住友電設株式会社
ACミドルレンジ(大阪府)
大阪アジアンタール FC(大阪府)

経歴

- 2012年 アジア太平洋ろう者競技大会
デフリンピック予選 金メダル
- 2012年 トルコデフワールドカップ出場
- 2013年 夏季デフリンピック(ブルガリア・ソフィア)出場
- 2014年 アジア太平洋ろう者サッカー選手権 銅メダル
- 2015年 アジア太平洋ろう者競技大会
デフリンピック予選 銀メダル
- 2016年 イタリアデフワールドカップ出場
- 2017年 夏季デフリンピック(トルコ・サムスン)出場
- 2018年 アジア太平洋ろう者サッカー選手権 銀メダル
- 2022年 アジア太平洋ろう者サッカー選手権 代表候補
- 2023年 デフサッカー世界選手権大会 銀メダル
- 2024年 アジア太平洋ろう者競技大会 金メダル